

パネルディスカッション 「若手科学者と研究費」

住井英二郎

本年6月2日に開催された公開シンポジウム『第2回若手科学者サミット』（日本学術会議 若手アカデミー 若手科学者ネットワーク分科会 主催）において行われたパネルディスカッション『若手科学者と研究費』¹の様態を報告する。

緊縮財政²や国立大学における若手研究者の減少³等による日本の研究力低下⁴が国内外から指摘される中、「若手科学者」と「研究費」という題目は、現在の日本の学術研究の問題点が顕著にあらわれるintersectionと思われる。本パネルディスカッションでは以下の方々をパネリストに迎え、自己紹介に続き、後に述べるいくつかの具体的なキーワードについて活発に意見を表明・議論していただいた。司会は筆者がつとめた。

（順不同・敬称略、所属は当時）

池田一郎（文部科学省研究振興局振興企画課 課長補佐）

奥 篤史（文部科学省大臣官房総務課 企画官・副長）

斉藤卓也（文部科学省研究振興局基礎研究推進室 室長）

佐々木満（熊本大学パルスパワー科学研究所／大学院先端科学研究部 准教授）

樋口富彦（東京大学大気海洋研究所 特任研究員）

平田佐智子（若手アカデミーメンバー・株式会社アイデアラボ 研究員）

井藤 彰（若手アカデミー若手科学者ネットワーク分科会副委員長・九州大学 准教授）

自己紹介では、まず文部科学省の方々に、これまでと現在の業務、および本企画に関連して思うところについて一言ずつ述べていただいた。社会保障費が増大し国の財政がひっ迫する中で、研究費を含む文教予算はどうあるべきか、政府内でも常に問われ続けている。そのため、国立大学運営費交付金等のいわゆる基盤的経費は18歳人口の減少もあって減額されやすい一方、社会的に注目される分野への「選択と集中」による大規模予算は措置されやすい傾向がある、といった基本的背景が提示された。なお、企画の段階では予期できなかったことだが、おりしも国会対応に追われるところ、こちらをキャンセルせずお越しいただけた方に深謝したい。

その後、各研究者からそれぞれの分野と研究費の特徴について簡単にご説明いただいた。例えば筆者の分野（理論計算機科学）では「紙と鉛筆」ならぬ「論文を書くパソコンと、学会に参加する旅費と、研究を行う時間」が重要（特に最後が最重要）であるが、井藤氏の分野では消耗品であるiPS細胞培養液が1本8万円との話

第二のキーワードは「科研費改革」とした。今年度募集からの科研費改革自体については各種説明会等が開催ないし予定されており、この

総じて、国の財政・経済状況の問題はあるにせよ、これまでは行政・事務組織と（特に若手の）研究者の意思疎通が決定的に不足しており、「研究費」ひいては科学・技術政策に関する今後の取り組みにおいては「コミュニケーション」が

非常に重要であるという点を参加者全員が実感・合意するパネルディスカッションとなった。

注

- 1 主催側の手違いにより、プログラムでは『若手研究者と研究費』と表記されていた。この場を借りてお詫びしたい。
- 2 "What price will science pay for austerity?" Nature 543, S10–S15 (23 March 2017), <https://dx.doi.org/10.1038/543S10a>
- 3 『国立大学で若手研究者が減少傾向』Nature ダイジェスト Vol. 9 No. 6, <https://dx.doi.org/10.1038/ndigest.2012.120605>
- 4 科学技術・学術政策研究所『科学技術指標2017』『科学研究のベンチマーキング2017』
- 5 <https://twitter.com/konotarogomame/status/783135486504148992>
または <https://j.mp/KTLCL>
- 6 <https://twitter.com/konotarogomame/status/765701878197788672>
または <https://j.mp/KTCNR>
- 7 <http://blog.goo.ne.jp/toyodang/e/26f372a069cbd77537e4086b0e56d347>
または <https://j.mp/TYDPCV>